

# 中学校 第1学年 音楽科 学習指導案

愛知県春日井市立高森台中学校  
教諭 菅 利行


- 題材名** リコーダーの基本的な奏法を身につけてアンサンブルを楽しもう（3時間）
- 題材のねらい** 『家路』を教材とする。旋律の流れや和声の響き（テクスチュア）、アーティキュレーションとの関わりを感じ取り、曲想にふさわしい表現を創意工夫して演奏する。
- 本時のねらい** 互いの声部を聴き合いながらアンサンブルを行い、基本的な奏法（息の使い方・タンギング・運指）を生かして『家路』の曲想にふさわしい表現を工夫する。（第2時）
- 指導時期** 6月中旬～7月上旬

## 指導者用デジタル教材活用の意図・目的

『家路』は穏やかな旋律と緩やかなフレーズ構造を持ち、息の使い方やタンギングによる音色の違いを捉えやすい器楽教材である。しかし、姿勢や息づかい、タンギングなどの基本的な奏法が十分に整わないまま合奏に入ると、音色や響きのまとまりが得られにくい。そこで本題材では、小学校で学んできた内容を確認しながら、生徒の基本的な奏法に対する技能を同じ水準に整えたいと、全体の響きを聴き合い、曲想と音楽の構造との関わりを捉えながら器楽表現を工夫する学習につなげたいと考えた。あわせて、生徒が課題を明確にし、学び方を自ら調整しながら取り組めるようにすることも重視した。

本校では、Google Classroom（学習支援ツール）に題材の課題や意識する見方・考え方（音楽を構成する要素）、観点ごとの目標等を提示し、学習の見通しをもたせたいと、生徒がそれをもとに主体的に学びを進めている。生徒一人一人が抱える課題は異なり、また、少人数のアンサンブル学習では、グループごとに必要な練習や改善点も異なるため、一斉指導のみでは支援が行き届きにくい。そこで、必要に応じて指導者用デジタル教材を活用し、運指の動画などのコンテンツを確認させた。デジタル教材を共通のよりどころとして位置づけることで、基本的な奏法に関する理解差を調整しながら学習を自走させ、互いの響きを聴き合って協働的にアンサンブル表現を深めることをねらいとした。

## 本時（第2時）の展開

	活動内容	デジタル教科書・教材の活用
導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「指導者用デジタル教材」の初期画面を開いてコンテンツを起動する。</li> <li>● Google Classroomを開き、本時の目標と流れを確認する</li> <li>● 学習シート（Googleスプレッドシート）に入力された個人（もしくはグループ）の目標と練習内容を確認する。</li> </ul>	 <p>The screenshot shows a digital interface for a teacher's guide. On the left is a book cover titled '指導者用 音楽のおくりもの' (Teacher's Guide: Music's Little Things) featuring a guitar, a drum, and a recorder. On the right are three blue buttons: '最初のページを開く' (Open the first page), '目次を開く' (Open the table of contents), and '前回の続きを開く' (Open the previous page). There is also a close button '× おわる' and a settings gear icon in the bottom right corner.</p>

各々の目標に向けて学習を進める。

【グループへの支援例】

支援例①

- **S** : 指がうまく動かない。
- **T** : どの指が動きにくいですか。
- **S** : 左手の薬指が間に合わない。
- **T** : この画面を見ながら、ゆっくり指だけ練習してみましょう。

- 必要に応じて、動画などを提示し、課題解決の手がかりとする。



- タンギングに問題がある場合は『リズム de ゴー』を振り返る。



- マーカー、スタンプなどを用いて視点を明確にする。



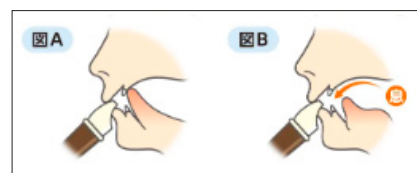
展開

支援例②

- **S** : 3小節目からどんどんずれてしまう。
- **T** : この画面を見て、気づくことはありますか？
- **S** : 1パートと2パートが追いかけてこみかたいになっている。
- **S** : 私たち（2パート）は、1パートの「ラーシ」を聴いて入れればいいね。

支援例③

- **S** : 音色が安定しない。
- **T** : 舌の使い方と息の流れを思い出してみましょう。tu と du はどんな違いがありましたか？
- **S** : tu は輪郭がはっきりしていて、du や di にするとやわらかい音になった。
- **S** : 息が安定したときは音が伸びて芯がある感じ、散ったときは弱く細く聴こえた。
- **T** : 音の高さに合わせてタンギングを変えてみると、より安定します。



	低音域	中音域	高音域
かたい	と to	つ tu	てい ti
	ど do	ど du	てい di
やわらかい	ろ ro	る ru	り ri

	活動内容	デジタル教科書・教材の活用
展開	<p><b>支援例④</b></p> <p><b>S</b>：曲に合った表現はどうしたらいいかな？</p> <p><b>T</b>：音を切ったりつないだりすると、曲の雰囲気はどう変わりますか？</p> <p><b>S</b>：切ると歯切れがよく、軽い感じになる。</p> <p><b>S</b>：つなぐと流れが自然で、やわらかい感じになる。</p> <p><b>T</b>：教科書 p.20 のアーティキュレーションの音声を聴いて、tu/du/di の違いや、音を切る/つなぐことで曲想がどう変化するかを考えてみましょう。</p>	
まとめ	<p>今日の学びを振り返る</p> <p><b>【学習シートの記入例】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●「他のパートとタイミングを合わせるために、相手パートの音をよく聴くことが大切だと改めて気づいた。息の流れを意識すると、曲の印象が変わることがわかったので、次回の課題にしたい。」</li> <li>●「姿勢と呼吸を意識したら、前よりやわらかい音が出た。アーティキュレーションも同じで、姿勢と息づかいを意識したら、難しい奏法でも吹くことができたので、これを定着させていきたい。」</li> </ul>	

## 指導者用デジタル教材を活用したことで得られた効果

指導者用デジタル教材を活用したことで、リコーダーの基本的な奏法のポイントを視覚的に認識でき、生徒が「どこをどう直すと音が変わるか」を具体的に捉えやすくなった。学習の見通しをもち、生徒自ら学習を進める中で、つまづきが生じた場面に応じて必要なコンテンツを確認し、学習に生かす流れをつくることができた。その結果、教師の一言指導に依存せず、各々が課題を明確にしながら練習を進め、互いの声部を聴き合って合わせ方や表現の工夫を深める姿が見られた。また、コンテンツを参照しながら「tu/du/di」の違いや、音を切る/つなぐことによる曲想の変化を確認することで、曲にふさわしい表現を自分たちで探究しようとする学びにつながった。

今後は、こうしたデジタル教材による視覚的支援に加え、生成 AI を活用して楽譜や自分たちの演奏音源を読み込ませ、改善点の助言を得たり、うまくいかない部分の練習方法を相談したりするなど、表現の意図（「○○な感じにするにはどこをどう吹くか」）を言語化しながら学びを深める取り組みへと発展させられることもありえる。これにより、生徒が自ら課題を設定して修正する学びがさらに促進され、協働的なアンサンブルづくりの質を高めることができると考える。